

---

# ボクサーの異世界転移

赤海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ボクサーの異世界転移

### 【Nコード】

N3218BA

### 【作者名】

赤海

### 【あらすじ】

過去にボクシングの大会でいくつもの優勝を飾った経験がある『みつたつばき深唄翼』。大会目前、事故に遭い一生ボクシングが出来なくなってしまう。その日から何事にもやる気が起きなく自暴自棄状態。それから1年後のある日、買い物に出かけようと玄関のドアを開けたら・・・

真っ白な光に包まれた。

## プロローグ

俺こと深唄翼みひたしはねは、大勢の人から”天才”と呼ばれていた。理由は、ボクシング。

親父がボクシングジムボクシングジムの会長で俺は小さいころからサンドバックに拳をぶつけていた。

親父の強要で最初は、いやいややっていた。ジムには、周りに知らない大人ばかりで普通に怖かった。

10歳の時、いつものように練習をしていたら親父が「スパarringスパarringをしないか？」

と言ってきた。

いい加減、特訓じみた練習に嫌気がさしていたので俺はすぐに承諾した。

スパの相手はジムの中で一番弱い人だった。

俺のスタイルはアウトボクサーで相手はインファイター。

周りの大人は勝てるわけがない、と言ってきたから見返してやろうと思った。

結果、俺は勝った。

さすがに何発かはもらったが、ダウンは取られなかった。

その日から俺は変わった。

戦いの楽しみ、勝利の喜びを知ったから。

強い奴と戦うため、もっと勝利の感覚を味わうために全ての時間を練習についやした。

中学を中退。時には一日の三食を全部ぬかしたこともあった。

プロテストに15歳の若さで合格。

俺の要望ですぐに試合に出させてもらった。

優勝は出来なかったが、4位になれた。

相手が、大人と考えれば最高の結果だと言える。

けど、俺は納得いかなかった。

ねらっているのは、王者の座。

だから今まで以上に練習をつんだ。体がぶっ壊れるぐらい。

そして俺は16歳で優勝の栄冠を勝ち取った。

それから快進撃が始まった。

同時に“天才”の名も広がり始めた。

## プロローグ（後書き）

アウトボクサー

ヒット&アウェイを主体に攻める遠距離ボクサースタイル

インファイター

一発が勝負を決める近距離ボクサースタイル

## 一話

タツ、タツ、タツ、タツ、シユツ、シユシユツ

走りながらシャドウをませる。

シユツ、バツ、シユツ、シユシユツ、シユツ、バツ

体は軽い。割と調子は良い方だ。

試合まで一週間。この感じが続けばいいけど。

一週間後に優勝のかかった大事な試合を控えていた。

少し緊張気味で、いつもより早く起きたので朝のロードワークをこなしているところだ。

いつもと同じルートで、いつもと同じメニュー。だが、いつもと違うのは霧が濃くかかっていることだ。

けど、大して気にしなくていいだろう。

と、思っ曲がり角をまがると

ブオーン

トラックが目の前に迫ってきた。

\* \* \*

「・・・っ!？」

ガバツ

周りを見渡すと自分の部屋。

全身汗まみれだったが特に変わった様子はない。

「・・・夢、か・・・」

ふと目を向けると、今はもう『使えなく』なった左足が。

「ふう」

ひかれそうになった時、とっさの判断で後ろに飛んだのだがギリギリ間に

あわず左足だけがまきこまれた。

意識が一瞬でとんだ。気が付いたら病院のベットで横になっていた。俺をひいた人が電話したらしい。

横になりながらずっと考えていたのは足のこと。

だが医者から言われたのは、衝撃的な事実だった。

『もうボクシングは・・・』

「こっちは現実・・・」

もう戦えない、もうあの興奮は味わえない、もう拳を振るうことはできない、

もうリングでは踊れない、もう、もう、もう、もう、もう、もう、もう、もう、もう、もう、

もう、もう、もう、もう、もう、もう、もう、もう、もう、もう、

、  
、  
、

あの日から約2年。

俺こと深唄翼は18歳になった。学校とかにはいつていない。

歩けるけれど、歩く気がしない。

高校生らしいことをやるうとは思わない。

簡単な話、すべてにやる気が起きない。

「朝食ねえな・・・」

仕方ないから、ベットに投げっぱにしていたジャージをはおりながら重たい腰をゆっくりとおこす。

財布を確認する。かなり入っている。

家に親はいない。母親は俺が幼いころに他界した。親父は、ボクシングができなくなった俺を見捨ててでていった。

だから家には俺一人。ご飯は自分で買い出し。

考えていると玄関についた。靴を履きドアを開けたら

真っ白な光に包まれた。

こんな感じの展開、二回目だな・・・



## 二話

ガサガサ、クガー、ピロピロピロ、・・・

「・・・ん？」

騒がしい音のせいで目が覚めたら木に囲まれていた。  
俺は森の中でたたずんでいた。

「ここは・・・森？」

草木が生い茂っている光景を見たら誰だっけと森だと思っただろう。

「俺は確か、買い物に行こうとして・・・」

光に包まれた。そんで、どっかに飛ばされた。  
いろいろと悩むとこだけど、こんな神隠し的な現象を解き明かす方が無理だろ。

とりあえず人に会わないと分らない事だらけだし、そもそもここが日本かどうかも怪しいところだ。  
まず、この森を抜けないと。

ガサガサッ

??。近くの草むらから音がした。

ガサガサガサッ

それもだんだんこっちに近づいてくる

!!。誰か人がいるのか。よし、なら聞きたい・・・。  
待て。こんな山奥みたいな森に人がいるのか。もしかしたら、危険な野獣のほうの可能性は高くないか？

人間であってほしいけど、野獣かもしれない。

『何か』の気配が近寄ってくる。

さあ、どっちだ。人類か、ケモノか

・・・ガサガサツバツ

答えは

「・・・、両方？」

「プググ・・・」

出てきたのは、

二足歩行で

子供サイズ。

ここまでならまだ人類と呼べる。けど

全身緑色

醜い顔

豚のような鼻

こん棒を振り回し

着衣と言えば腰に布だけ

一番気になるのは頭上に輝いている『?????7LEV』・・・名前か？

結果、俺の小さい脳みそが出した答えは

人類とケモノを合わせて・・・

化け物（笑）

あっ、俺に気がついた。  
うえっ気持悪。つばを周りに振りまきながらこん棒を構えてこっちに迫ってくる。

あれで殴られたら死ぬよな。でもどうせやりたい事ないし・・・。  
どうしようかな？

・・・

あんな奴に殺されたら俺のプライドが許さん。  
出来るだけ左足を使わないでやれるか・・・。

「プガーーッ」

「っ!？」

化け物（笑）がこん棒を振りおろしてきたが、とっさに反応して右に飛んだ。

こん棒が地面をえぐった。ヒュー、あぶね。

ん？ なぜ『（笑）』が付いているか？

フフツ（笑）

俺が名付け親になったからに決まっているだろ（笑）？

今のは忘れてくれ。

さてと、動きは見えるな。プロのボクサーより倍以上遅いから右足だけでもいけるか。

化け物（笑）がこん棒を横にスイング。

「はっ」

一歩後ろにさがってかわす。

化け物（今はマジなのでなし）が行動を終えて腕を伸ばしている間に、右足で地面を蹴りふところに入り込みあごをねらって左手でアッパーを繰り出す。

「ふっ」シュツ、ゴキツ

「プガッ!？」

化け物の体が浮かび上がる。

相手に次の行動の隙をあたえない。

右足を軸に、

右フック

シュツ、バキツ

「プツ、グツ」

そのまま右腕を唸らせ、無理やり地面へと叩きつける。

ガンツガガガッ

土が舞い上がり化け物が転がる。こん棒を手放した。

これでラスト。

化け物が立とうとしてる間に、左足を引きずりながらも化け物に駆け寄る。

「はああー」

化け物が立ち上がるのと同時に、俺の一番の得意技

コークス・！！！！？？

「があああつー！？」

グツ、こんなときに左足が・・・！！？ツ

化け物に目を向けると眼前には真緑の拳が

ゴシツ      バシンツ

「がっ」

次は俺が叩きつけられた。5メートルぐらい後ろにあった木に。

一瞬でも遅かったら死んでたな、俺。

殴られるときに俺は、左腕でガードしてた。そのおかげで左はもう使えない。

意外と力つよかったな。

「じふっ・・・！！？」

咳と一緒に血へどまで出やがった。こりゃあ、肺に穴あいたな。

化け物がこん棒を拾ってこっちにゆっくり近づいてくる。

ああ、終わった。もう立つことさえできない。あんな奴に負けるのか・・・。



俺は痛みと疲労で意識を手放した。

## 三話

『?????』

あぁー。

やっぱり冒険者向かないのかな、私。

二日かけてやっとゴブリン4体討伐って、これじゃ生活が成り立たないよ。

宿代、剣の修理代、防具の新調、女の子らしい事が一つもないのはしかたがないよ。

おしゃれをしようと思っても、M<sup>メタル</sup>が足りないもん。  
これからどうしようかな……？

ウウウググウウ

小さいからよくわからないけど、ゴブリンの鳴き声？かな。  
あっちの方から聞こえる……行ってみよう。

\* \* \*

向かった先で私が見たのは、

素手でしかも防具らしき物は一つも身につけず

ゴブリンを地面に殴りつけてた

自分と同じ年ぐらいの男のひとだった。

すごい……。いくら相手がゴブリンでも、あれじゃ真っ裸同然なのにゴブリンをおしている。

一瞬、顔が見えた。

目はキリッとしているけど、何処にでもいるような中性的な感じ。

髪はぼさぼさだけど純粋な真っ黒。

まあ、かっこいい部類に入ると思う。

ところで吹っ飛ばされたゴブリンは……。もうふらふらだ。

別にあーゆう魔物を吹っ飛ばすのは珍しい事じゃない。冒険者なら、出来ない人のほうが少ない。

だけど、それは武器を必ず装備しているからだ。『装備無し』を基準に入れたらその数は、

ぐっと減るだろう。

それを彼は軽々こなしている。

本当の冒険者は彼のような人のことを言うんだろっなあ。私じゃ論外だね。

そろそろとどめをさすみたい。

最後もやっぱり拳を振りゴシッ！？逆に吹っ飛ばされた！？

なんでっ？間合いは完璧だったはず……。！？

大変！ゴブリンが・・・彼のもとへ。

体は動いていた

お願い・・・間に合って・・・。

走りながら越に装備してある剣の柄を握る

ゴブリンがこん棒を振り落とそうとしたまさにその時

剣を抜き放った・・・

ザシュンッ

ゴトッ、、、ぶしゅー

ゴブリンの首が落ちて血が吹き出た

「ふう、何とか・・・間に合った・・・」

ため息をついて彼をしてみる。

呼吸をしている音が聞こえるから気を失っているみたいだ。

「どっしりよう・・・」

今さらだけど、この服見たことない種類。とりあえず、怪我がないか見てみよう。

骨が何本か折れてるわね。腕とろっ骨が。下手に動かしたら危ないし、様子を見ましょ。

私、よくゴブリンの首とばせたわね・・・。

\* \* \*

ガサガサ、クガー、ピロピロピロ、・・・ギャオオーン  
・・・パチッ

変わらない目覚め方、変わらない景色

「夢じゃなかったのか」

そつとつぶやいたその声には少し悲しみの色が混じっていたように聞こえた

「ん、起きたの？」

・・・ちよつと状態を確認してみよう。

さつきと変わらず生い茂っている草木。

暗くなつた夜空。

横になつている俺。

子供には見せられない物体X。

可笑しなものがもう出てきたけどまだまだ行くよーww

「ねえ、聞いている？」

遠くからこつちを睨む物体X。

俺が寝ている横で体育座りをする、俺と同じ歳ぐらいの女性。包帯がまかれた俺。あつ、あの時折れてたのか。

ん、物体Xが何だつて・・・。

さっきの化け物（笑）だよ。

さて変わったところと言えば、ほぼ全部？

「しゃべれないの？」

「いやいやしゃべれるよ」

額に血管が浮かんでた。

「じゃあ、なんで黙ってたの？」

選択を間違えていたら俺は死んでいただろう。

「いろいろと考え事をしてて」

「ふん……。体は大丈夫？」

異常は……。ないかな。左足はいつもの事だし。

「ああ、大丈夫だ。この包帯は君が？」

「うん、そうだよ……。ところで私はミルア・シスハート。あなたの名前は？」

？、聞きなれないな。外国人か？

「俺の名前は、深唄翼<sup>みつたつばき</sup>。君ってどこの国の人？」

「ミウタ？が名？」

「いや、翼が名前」

「？そうなの。さっきの質問のクニって何？」

はい？……。質問を変えよう。

「じゃ、じゃあここってどこ？」

「……ここは、メルビア大陸の力カの街の近くの『力カの森』よ」  
「……どこや……。」

「どうしたの？かたまって」

「……地球って知ってる？」

「チキユウ？さっきから意味わからない事ばかり言ってるけど、本当に大丈夫？」

「……オーマイゴツト……！」  
「ここ地球じゃないのか……。」

俺はどうやら……異世界とやらに来てしまったようだ。

「あー、驚かないで聞いてほしいと思う」

「なに？」

「俺はこの世界の住人じゃない。ふつとした拍子に飛ばされた異世界人だ」

「……ヘーソウナンド」

「おいっ！そんな目で見るな。事実だ、信じてくれ」

一瞬、ミアの目がゲテ物を見ているような眼に変わった。話は、変わるがミアは・・・

とても可愛い。

目はぱつちりと開いて、人なつっこそうな顔立ち。

髪の色は緑色で、髪質はつやつやサラッ。

スタイルもかなり良い。

「信じてもらえないだろうか？」

「・・・いいえ、信じるわ。この森で防具を着用しなくて武器も持たない痛い人を見たら誰だって信じるわよ」

「痛いって言わないで！」

こんな美女に痛いって言われたらさすがに傷つくよ。今なら、泣けるよ。

「・・・それじゃあ街に行こう。話はそれからってゆう事で。」

「ううう。わかった・・・悪いが肩を貸してくれ。一人じゃ立てない」

「・・・わかったわ。はい」

俺達は歩き始めた。

俺は彼女の後ろを歩いている。

なぜかって？

美人に冷たい目で見られ、痛い子あつかい。  
拳句の果て、何から何までやってもらう。

俺あ今、涙が止まらねえぜ・・・。



## 四話

俺達は力力の街を目指しながらこんな会話を繰り返していた。

「なあ、この世界の人か異世界の存在を信じているのか？」

「うん、大昔には存在してたって聞いてるけど・・・」

「むかし？」

「うん。この世界は昔に人種軍と魔物軍の戦争があってその時に人種軍の先頭に立って戦ったのが」

「のが？」

「異世界から呼ばれた勇者だった、って古い書物にはそう書かれてるよ」

「ただの伝説？それとも・・・」

「わかってないよ」

「そっか・・・」

「そーゆう魔法も使ってないって言われてるし」

・・・魔法？さすが異世界、ファンタジーだな。

「魔法ってのは呪文とやらを唱えて・・・すごいのが出るやつか？」

表現が出てこなかったんだ。

「すごいのって・・・まあ呪文を唱えるのはあってるわよ。あなたの世界には魔法はあったの？」

「いや、ないよ。魔法ってどんなのがあるの？」

「全部説明するには長くなるけどいい？」

「いいよ」

「魔法は大きく分けると属性魔法と特別魔法の二種類に分けられるの。どっちも最初は『色』から始まって、そこから才能にもよるけど努力次第で魔法のランクアップが起きる事があるよ。あっ、後魔法を使うときは必ず魔力って言う力を使って使用できるから」

「『色』って？」

「色は、全ての魔法の素になったマナのことよ。詳しく説明すると属性魔法で火属性は赤みたいに、

水は青・電は黄・風は緑・石は茶・光は金・暗は黒。

特別魔法だと、

回復は白・補助は橙・召喚は紫。

これらの魔法は才能と努力次第でランクアップする事ができるの」

「フムフム、そんで」

「ランクアップすると威力が上がるのと、高等な魔法が使えるようになって三段階までランクアップをする。ここままで何か質問は？」

「はい先生。ランクアップすると名前は変わりますか?」

「いい質問ですね」

んっ!?

「一つ一つ説明すると、

赤から火、炎、陽属性

青から水、氷、天属性

黄から電、雷、邪属性

緑から風、山、鳳属性

茶から石、地、災属性

金から光、聖、星属性

黒から暗、闇、裏属性、ちよつと休憩」

さっきのは聞き間違えか。属性かっこいいな。

「続き行くよ。

白から回復、再生、新命魔法

橙から補助、強化、超化魔法

紫から召喚、契約、服従魔法で全部よ。色は生きるもの全てが持

ってるものだから」

「俺はあるのかな?」

「ん〜どうだろう」

「そついえば、どうやって自分の色がわかるの?」

「ああ、それは神殿に行けば調べてもらうことができるのよ」

「魔法で？」

「その通り。白色を持っている人たちが集まって運営してるんだよ」

運営って事は、金が取られるのか。金の単位はやっぱり違うのかな？

「なあ、このせか・・・」

「あ、カ力の街が見えてきたよ」

聞くのはあとでいいか・・・

\* \* \*

カ力の街に着いた時には夜になっていた。

カ力の街は結構にぎわっていた。商店がずらりと並び夜だと言つのに人が沢山いる。

「あなた怪我はだいじょうぶなの？」

「これぐらいなら一週間ですれば治る」

「んなわけないでしょ。骨が折れているのよ」

「前の世界じゃもつとひどい傷を負ったけど、一カ月で治ったから」

ボクシングじゃ当たり前。怪我なんて気にしてる暇がなかったね。

「・・・それ、普通じゃないわよ」

あー、話を変えよう。あんまり良い記憶じゃないし。

「つかさあ、俺どこで寝ればいいのか？」

ミリアは少し悩むそぶりを見せ

「・・・どうしようか？」

なんでこいつ俺をここに連れてきたんだ？

「はあ、・・・」

さて、動物たちと友達になってくるか・・・

「！？まっ、まっ。私宿とってるから一緒に良かったらそこに・・・」

「いいのか？知らない男を部屋に入れて？」

「良いよ、ちょうど一人が寂しかったし」

「んじゃ行くあてもないから・・・お願いします」

「うん。こちらこそお願いします」

寝床ゲット！！

怪我が治ったらどうなるんだ？

## 五話

次の日は別行動になった。ミルアはギルドへ行った。帰ってくるのは昼過ぎになるらしい。

現在俺は骨折のおかげで宿で絶対安静中。

.....

暇なので、昨日ミルアから教わったこの世界『グラパダ』についてまとめよう。

まず地理だがこのカ力の街はグラパダ大陸の西に位置している。街はカ力の街以外に4つ。

ギルダの街

クバイトの街

ケーパの街

ヤデノの街

気がつく人もいるだろうが、頭文字が「か行」になっているのになぜか一つ「や行」が入っているのだ。なんでだろうな？ つっこみた人はつっこんでくれ。俺はもうつっこんだ。

話を戻して、この大陸は巨大な森に囲まれてる。森はどこまで続かなかはわからないらしい。

わかっていていることは、その森から魔物が現れる事。新しい植物が一年ごとに生まれる事の二つ。この森は大陸には進行してこない。

次にお金の事だが、この世界ではMメタルと呼ばれている。

Mはコインに似た形状をしている。

一番安くて1S

ストーン

が10枚で1B

ブロンズ

が10枚で1B

Bが10枚で1SLシルバー  
SLが10枚で1Gゴールド  
日本円にすると

S≒10円

B≒100円

SL≒1000円

G≒一万円になる。

野菜類一つでだいたい1Bと3S。

最後に魔物の存在。

魔物は動物に魔力がやどって凶暴化した生物を総合して魔物と呼ばれている。

スライムから龍までいるらしい。前の日に俺を襲ったあの化け物(笑)はゴブリンって言うんだって。

魔物は主に人を襲ったり、農作物を荒らしたりしている。

魔物の被害に対抗してギルドがある。

ギルドは魔物を討伐するのを目的として建てられた。

以上、深唄翼でグラパダの世界をお送りしました。

\* \* \*

それから4日後。

俺の怪我は全治した。

「本当に治った!？」

「だから言ったら、治るって」

「いや、普通は信じないでしょ・・・それでどうするの？これからこれから・・・どう生きていくか。突然放り出された俺はこの世界でどうするか。」

「俺は・・・」

一週間悩み続けて出した答えは

「元の世界にはもう戻れないと思ってる。戻りたいとも思わない。だから俺はこの世界

で死ぬまで楽しむために頑張ろう。今まで出来なかった事全部やりたい。」

色んな人とかかわってみたい。高みをめざしたい。これが俺の答え、だ」

ボクシング尽くしの人生だった俺は周りにはグローブしかなかった。一度も変わるうとは思わなかったそのスタイルに囚われ16年間。ボクシングが出来なくなったら後にも変われなかった。地球にいたら俺は一生駄目な人間だっただろう。だから変わる。変える。

今日は俺の大きなはじめの一日

「そうなんだ……。」

ん……!!

「なあ、良かったら、俺と組まねえ?」

色んな人とかかわる為の計画N01・とりあえず何かしら誘う。

「……そうだね。あなた強いから頼れるよね。これからお願いします」

ミリアはこちらに向かって頭を下げた。

色んな人とかかわる為のN01・とりあえず何かしら誘うは、成功したらしい。

俺も彼女に頭を下げた。

「こちらこそお願いします」

ここに異世界人同士のパーティが静かに結成された

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3218ba/>

---

ボクサーの異世界転移

2012年1月13日23時50分発行